

金融市場動向

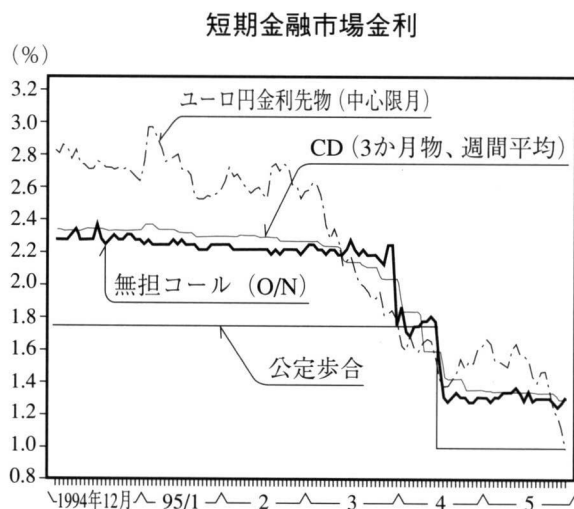
—平成7年5月—

(平成7年6月14日)

1. 短期金融市場

5月中の無担コール・オーバーナイト物レートは、概ね横這いで推移した。CD（譲渡性預金）3か月物金利については、下旬まで安定的に推移した後、月末にかけて低下した。一方、ユーロ円金利先物（3か月物、金利ベース）は、中旬までは揉み合っていたが、下旬に大きく低下した（なお、23日に限月交替＜中心限月＞95年12月限→96年3月限）。

コール・プロパー手形市場資金平均残高（全国）は44兆585億円と前月（45兆3,349億円）に比べ減少した。

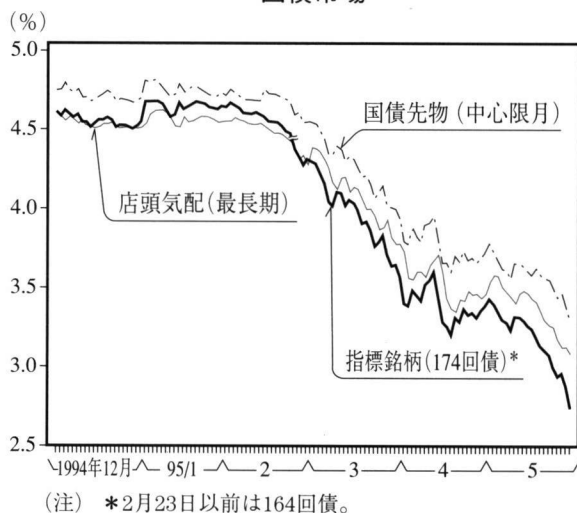


2. 資本市場

5月の長期国債利回り（174回債）は、上旬

から緩やかに低下していたが、市場における景況感の後退もあって、下旬から下げ足を速め、結局2.745%で越月した（前月末3.400%、国債先物中心限月利回り<19日に95年6月限から9月限に交替>は3.311%<前月末3.745%>で越月）。国債の出来高は、現物（店頭取引）は前月並み、先物は前月を上回った。

既発債市場利回り
—国債市場—



株式市況（日経平均株価）は、月初はやや上昇したものの、その後は下落基調を辿り、結局15,436円と前月末（16,806円）を大きく下回って越月した。株式出来高（東証1部、月中1営業日平均）は、2.43億株（速報）と前月（2.37億株）を若干上回った。

株式市場



5月の国内公募普通社債は、長期金利の大幅低下を受けた電力、商社等の前倒し起債がみられ、月中5,750億円（4月2,850億円）と極めて高水準の発行を記録した。一方、国内エクイティ市場での発行（5月払い込み分、増資を除く）は、決算発表を控えた発行体の見送り姿勢が強まり、一段と低水準の発行となった（4月480億円→5月300億円）。

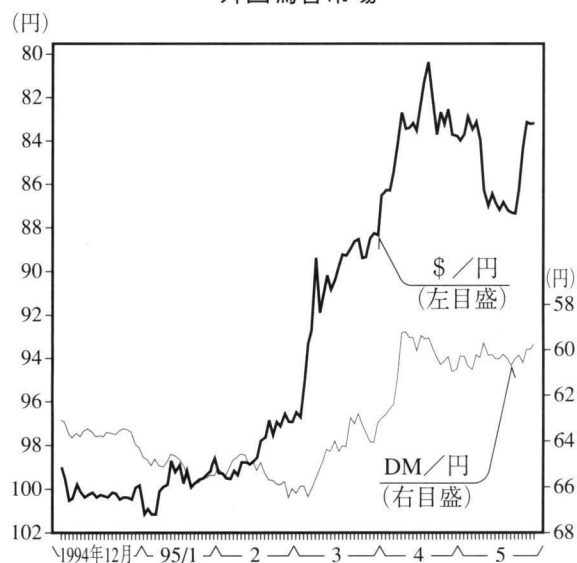
3. 外国為替市場

5月の円の対米ドル直物相場（東京市場、17時時点）をみると、月前半に83円近辺から87円近辺まで下落した後、安定的に推移していたが、月末にかけては米国景気減速観測等を背景に再び円高化し、結局83.19円で越月した（前月末83.77円）。なお、31日の海外市場では、日米欧主要国による協調介入の報を受けて、85円台まで軟化する局面もみられた。円の対独マルク直物相場（東京市場、17時時点）は、月中を通じ

概ね60円台で推移し、結局59.78円で越月した（前月末60.87円）。

この間、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は212.0億ドルと、高水準を記録した前月（234.4億ドル）をやや下回った。

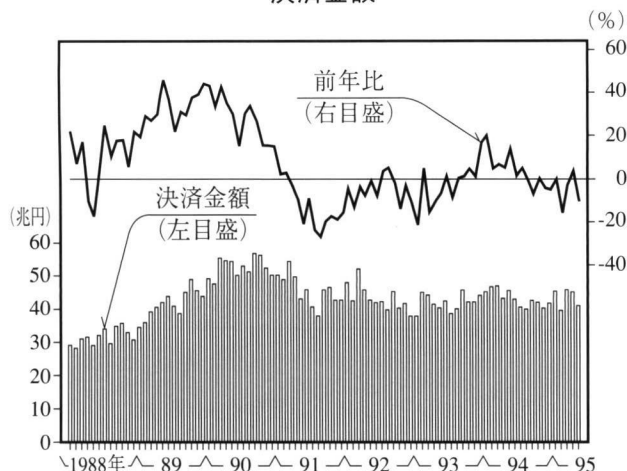
外国為替市場



4. 決 済

5月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、手形交換高（東京）は前年同月を大幅に下回った（前年比△39.4%）が、全銀システム取扱高は前年同月を上回った（同+5.7%）。この間、外為円決済交換高は前年同月を下回った（前年比△5.1%）。また、国債の決済金額（1営業日平均）については、移転登録は前年同月を大幅に上回ったが、振込口座振替は前年同月を下回った（移転登録：前年比+35.3%、振込口座振替：同△3.9%）。

決済金額



(注) 1. 1営業日平均。
2. 手形交換高(東京)、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

5. 資金需給、金融調節

5月の資金需給をみると、財政等要因が1兆9,085億円の不足(前年同月1兆6,101億円の不足)となった一方、銀行券要因は2兆4,399億円の余剰(同2兆6,925億円の余剰)となったことから、全体では5,314億円の余剰(同1兆824億円の余剰)となった。

こうした状況下、日本銀行はFBの売却等により資金を吸収した。

6月の資金需給(国債発行織り込み前)を窺うと、銀行券要因については、公務員・民間ボーナス支払資金を中心に、月中2兆8,000億円程度の不足(前年同月2兆6,001億円の不足)となる見通しである一方、財政等要因は、国債償還等を中心に7兆1,600億円程度の余剰(同6兆5,130億円の余剰)となる見通しから、全体では4兆3,600億円程度の資金余剰(同3兆9,129億円の余剰)となるものと予想される。

6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

4月のM₂+CD平残前年比伸び率は+3.1%(速報)と前月に比べ0.5%ポイント低下した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+4.1%(速報)と前月比横這いとなった。

5月の銀行券平残前年比は+4.3%とほぼ前月(+4.4%)並みとなった。

5月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残(実質預金+CD、都銀、地銀、地銀Ⅱ)の前年比は+2.1%と前月比伸び率が上昇した。一方、総貸出平残(都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ)の前年比は+0.2%と1年ぶりにプラスに転じた。

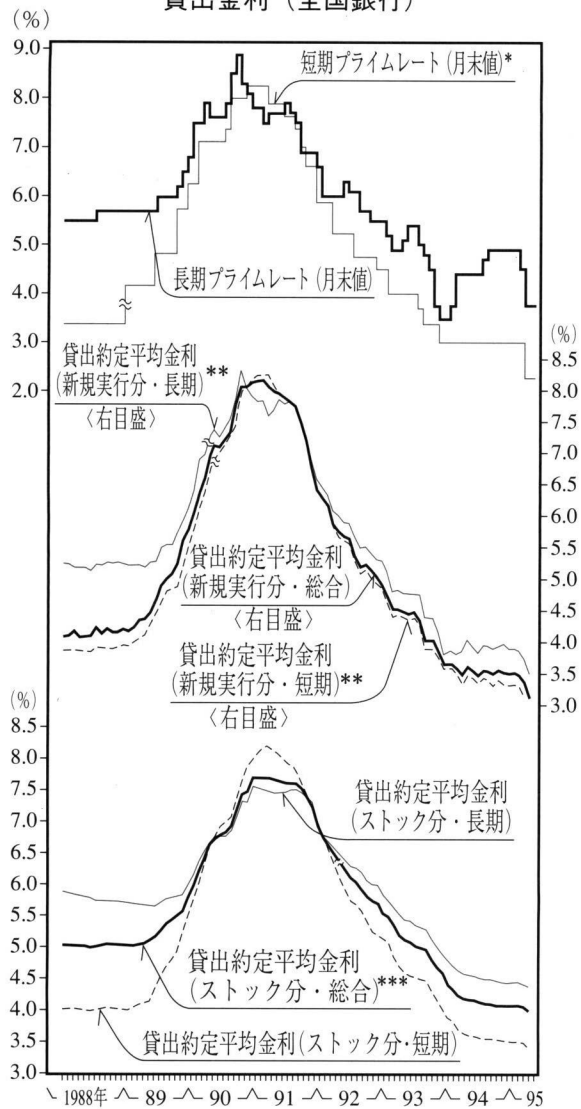
7. 貸出・預金金利

4月中の貸出約定平均金利(全国銀行)をみると、新規実行分については、長・短プライムレートを引き下げを受けて、短期が3か月連続、長期が5か月連続で低下したため(短期:前月比△0.157%、長期:同△0.201%)、総合でも6か月連続で低下し(同△0.189%、3月3.296%→4月3.107%)、既往ボトムを更新した。

また、ストック分についても、短期、長期、当座貸越ともに低下し(短期:前月比△0.118%、長期:同△0.070%、当座貸越:同△0.171%)、総合では22か月連続で既往ボトムを更新した(総合:3月3.997%→4月3.902%)。

この間、4月の定期預金金利(1千万円以上、3か月以上6か月未満の全銀受入金利平均)は、前月に比べ大きく低下した(3月2.016%→4月1.422%)。

貸出金利（全国銀行）



(注) * 1989年1月以降は都市銀行の中で最も多くの銀行が採用した金利。
 ** 1990年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。
 *** 1992年4月以降は当座貸越を含む。

(調査統計局)